



同時にデザインされた脚付きタイプのC-38 バロン、C-40 ハークネス 等はとても美しく、シンプルでスクエアなデザインだが、C-39 Harlan は複雑でテーパー状な面取りでコーナーキャビネットがデザインされており、前と横と上のどの角度から見ても楽しませてくれる。正面のサランネットを外すとバツフルが顔を出し、3ウェイ用にLE-175DLH、075用のユニット穴が開けられているのがわかる。今回の紹介するシステムはD130×2と075の2ウェイシステムなので、本来175DLHが取り付けられる穴には075用がアダプターで取り付けられている。



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。前号ではJBLの初期型ハーツフィールドを紹介したが、今回はこれとほぼ同時代の製品であるJBLのC-39／HarlanとC-49／Daleを紹介しよう。

第 34 回

ビル・トーマス期のJBL

1949年にジム・ランシングが突然に亡くなり、その跡を継いだのがビル・トーマスである。彼は会社経営に手腕を発揮して後のJBLのブランドイメージの基礎を築いていく人物。プロダクト開発にパート・ロカシー、デザイナーにアーノルド・ウオルフ、アルヴィン・ラスティグが起用され、おなじみの C-34ハークネス、C-38バロン等の Cシリーズがシステムラインアップされ、同シリーズは1967年に開発された C-68 SOVEREIGN 3 まで続く。この同時期には有名なHartsfieldやParagonなども製品ラインアップに並び、JBLの歴史の中で最も華やかな時代だったことがわかる。

本文／田中伊佐資

製品解説／岡田圭司(アトリエJe-tee代表)

撮影／小林幹彦(彩虹舎)

取材協力／SOUND CREATE



C-39/Harlan

1956年にコーナー型モノラルシステムとして開発され数種類のユニット構成が搭載可能で、075 / D130×2 /N2600 または 175DLH / 130B×2 / N1200 の組み合わせが最も人気があるシステムだった。最大で 3ウェイの38cmダブルウーファーまで搭載が可能なシステムとなっている。箱の材質は全て19mmの米松で構成されており、箱の構造はバスレフ型で底板に横長のポートが開けられている、以前紹介したD-1004と同様のダブルウーファー仕様のコーナー型のバスレフキャビネットなので箱内部の定在波が少なく音抜けが良く迫力のある鳴り方をする。

ビル・トーマス期のJBL

音楽にたつぷり浸れる
まさにJBLの「王子」

アトリエJe-teeからJBL C-49デールが入荷した連絡をもらった。これは珍しいモデルですよということなので、さっそく聴きに行くことにした。

JBLのCシリーズはどれもこれも美しく、サイズの大小を問わずどこでも一家言ある音がある。このデールもまったくそうだった。フルレンジ一発ではあるけど、強い説得力を伴って「音」ではなく「音楽」を心に響かせる。

店ではウェス・モンゴメリーの『A・デイ・イン・ザ・ライフ』がかかった。ほんわかしたイージーリスニング・ジャズのイメージを覆し、演奏者の覇気が迫ってくる。なんだろう、この魔力は。優秀なスベックの現代的なスピーカーでは、それこそイージーリスニングになっ

てしまいがちなのだが。

続いてステイリー・ダンの『ガウチヨ』。これはヴィンテージ泣かせのメリハリが利いた録音だが、リズムがしっかりと切れている。そしてネットワークで管理されていない強みを存分に発揮し、ユニットはのびやかでストレスなく鳴りきっている。マルチ・ユニットのスピーカーと比べれば無論レンジは狭い。だがそれを感じさせない。耳への「当たり」が気持ちいい。

この試聴後すぐ、同じくJBLのCシリーズのなかでも特に稀少なC39ハランが入り、銀座2丁目のサウンドクリエイト・ラウンジで販売されている知ら

せが届いた。店は5丁目から移転してほぼ1年になり、僕はまだ訪れたことがないこともあり、向かう足取りは軽い。

広いフロアの最も奥にC30ハーツフィールドが佇んでいた。ハーツが王様なら、その前の立つハランは王子。そんな雰囲気を出している。D130のダブル・ウーファーのわりにはコンパクトで、見れば見るほど細部のデザインが凝っている。フロントグリルは中心部がへこむように反っているのも、かなりの手間仕事だ。こんなにいい個体は市場にはあまり出てこないと岡田さんは言う。

小手試しにマイルス・デイヴィスの『フォア&モア』でスタート。機材はリンのネットワークプレーヤーLink DSMとオクターヴのプリメインアンプV110SE。シンバルの激しいあたりを聴くソースだけど、そんなことはどこかに吹っ飛ばすほど、ハイブローな風格というかアンビエンスを感じた。そういうオーディオ的な聴き方は止めると王子から論された気がした。

すぐにシナトラの「フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン」。しんみりと甘いバリトン・ヴォイスに聴き入る。音楽にたつぷりと浸りきれ音。いや、音とか言っちゃいけない。音を分析する気持ちは、音楽の鑑賞を邪魔することがある。最近そんなふうな心境の僕は、ハランを聴いてヴィンテージオーディオの在り方についてそう気持ちが傾斜したのだった。



C-49/Dale

1959年に生産が開始され、発売当時はユニットの組み合わせがLE8が1本搭載されたモデルとLE-10 / LE-30 / LX3 の2ウェイタイプが用意されていた。箱はこの時期から開発されたラバータイプのユニットが搭載されるため、19mm厚の板でかなりしっかりと造られており、丸いソバ型ポートのバスレフキャビネットとなっていて、小柄なキャビネット以上にスケールの大きなサウンドを引き出す。正面から見ると、この時期のJBLらしい一連の美しいスクエアなデザインだが、少し横から見ると斜めに切り返されたカットラインがとても斬新で時代を感じさせない完成度がある。